■研究十二月往来〈87〉■

元禄期における〈大原御幸〉の上演

表　きよし

今日しばしば上演される曲でも、歴史をさかのぼると、その時代の状況や能に対する好みの違いによって、意外に演じられていない場合がある。〈大原御幸〉も今日ではかなり一般的な曲になっているが、江戸時代初期まではあまり上演されていなかった。本稿は元禄期の〈大原御幸〉の上演記録を紹介しながら、〈大原御幸〉上演の歴史をさぐろうとするものである。

〈大原御幸〉に関する最も古い記録は、金春禅竹の伝書『五音十体』であるが、この伝書の内容に疑問があること、他の禅竹伝書や禅竹の孫の禅鳳の伝書に〈大原御幸〉に関する記事がまったく見られないこと、詞章から見て〈碇潜〉の影響を受けていると考えられることなどから、私は〈大原御幸〉の成立は室町時代後期ではないかと指摘したことがある（『中世文学』31号「壇の浦合戦を素材とした能―碇潜・先帝・大原御幸―」）。室町後期の作者付などに〈大原御幸〉の名が見えるので、〈大原御幸〉が室町後期にすでに存在していたことは確かであるが、当時の上演記録は見いだされていない。能が繁栄を取り戻した豊臣秀吉時代の演能記録が近年いくつか新たに発見されているが、それらにも〈大原御幸〉の名は見えない。織豊期まではほとんど演じられなかった能と言ってよいであろう。

江戸時代になっても、この状況はすぐには変わらなかった。『寛文以前書上』にはシテ方四座や囃子方の所演曲が列記されているが、シテ方の分には〈大原御幸〉が入っていない。しかし、ワキ方の高安彦太郎と小鼓の観世新九郎が〈大原御幸〉を所演曲として挙げており、また法政大学能楽研究所蔵『貞享松井本間之本』にも〈大原御幸〉の間狂言が載っているので、稀には上演されることもあったのであろう。

管見に入った最も古い〈大原御幸〉の上演記録は、藤田六郎兵衛氏蔵『古今稀能集』所収の番組で、元禄十四年（一七〇一）十月二十六日に京都の祇園で催された下御霊神社の寄進能五日目の本間左兵衛所演の分である。本間左兵衛は元禄十年刊『能之図式』によると京都の四条通柳馬場東へ入町に居住した能役者で、宝生大夫の弟子であった。元禄十年・十三年・十五年の興福寺の薪能にも出演しており、佐渡の能大夫の本間家と関係ある人物かと思われる。

翌元禄十五年には江戸で〈大原御幸〉が上演されている。徳川綱吉の護持僧だった隆光の日記『隆光僧正日記』によれば、同年八月五日に江戸城三の丸で新右衛門なる人物が〈大原御幸〉を舞っている。この新右衛門はもと小川松栄と称した宝生座能役者で、綱吉に召し出されて桐間番となった一色新右衛門である。新右衛門は八月二十六日にも同所で〈大原御幸〉を演じている。

元禄になって相次いで〈大原御幸〉が上演されているわけだが、シテを勤めたのがみな宝生座の人である点が注目される。上演された場所が京都と江戸であり、本間左兵衛と新右衛門の間に直接的な交流があったとは考えにくいから、当時宝生大夫がすでに〈大原御幸〉をレパートリーに加えていたために、弟子たちも〈大原御幸〉を演じたのであろう。宝生大夫自身による〈大原御幸〉の上演は、大倉三忠氏蔵『大倉七左衛門家能組』に見ることがで

きる。尾張藩関係の番組たる同書によると、元禄十六年七月五日の江戸藩邸での三座立合能の七番目に宝生大夫が〈大原御幸〉を演じている。先に挙げた記録よりは後になるが、宝生大夫が〈大原御幸〉をレパートリーとしていたことは間違いなかろう。

宝生座以外の人物による〈大原御幸〉の上演を捜すと、宮城県図書館伊達文庫蔵『能組留』に元禄十五年十二月九日の仙台藩江戸藩邸で越前守(藩主伊達吉村)が演じた記録がある。当時の伊達家は金春流・喜多流が併存していたが、吉村は大変な能好きであり、江戸城での新右衛門による〈大原御幸〉上演に刺激されて、金春や喜多ではほとんど上演されることのなかった〈大原御幸〉を舞ったのかもしれない。吉村はこれ以後、元禄十六年・宝永元年(一七〇四)・正徳二年(一七一二)にも江戸や仙台で〈大原御幸〉を舞っている。

以上見て来たように、元禄十四年を皮切りに〈大原御幸〉はたびたび演じられるようになるが、これは徳川綱吉の稀曲好みと無関係ではあるまい。綱吉は大変な能狂で、宝生流を贔屓し、自身も多くの能を舞ったが、稀曲・珍曲を見ることを好み、綱吉や嗣子の六代家宣時代には、それまでほとんど演じられることのなかった曲が続々と上演されている(岩波講座『能楽の歴史』)。〈大原御幸〉も『古今稀能集』に収められるほどの稀曲だったのに、綱吉の稀曲好みのおかげで宝生大夫らによって舞われることになったのであろう。

元禄から宝永にかけて何度か演じられたものの、〈大原御幸〉は今日まで引き続いて諸流で演じられてきたわけではない。綱吉・家宣時代が終わると〈大原御幸〉は再び演能記録から姿を消し、伊達家でも正徳二年に伊達吉村が舞って以後は舞台に上らなくなる。享保九年(一七二四)の段階では、観世・宝生の二流だけが所演曲に加えており(『萬聞書』)、享保以後の演能記録も観世大夫と宝生大夫によるものが数例見いだせるのみである。

そもそも〈大原御幸〉は、かつては能としてよりも謡として人気を集めた曲らしく、元和卯月本をはじめとする江戸初期刊行の観世流謡本では〈大原御幸〉は内百番に入っていることが多い。表章氏「〝うたい〟(謡)考」によれば、九代目観世大夫黒雪は〈大原御幸〉を素謡にふさわしい曲として特に大切にしていた。このことからも〈大原御幸〉が謡として重視されていたことが窺えよう。

元禄頃の〈大原御幸〉上演は一時的なものだった。謡としての人気が先行していた〈大原御幸〉が能としてもある程度評価され、諸流で演じられるようになったのは近代に入ってのことであるらしい。(早稲田大学大学院生)